

# (報われぬ国)行き場なく雑魚寝の老後

2014年1月13日 13時59分

<http://www.asahi.com/articles/ASG1D5JJ3G1DULFA00B.html>

4月から消費税率が8%に上がり、「負担増の時代」が幕を開ける。だが、負担は超高齢化社会で報われるのだろうか。社会保障の現場から報告します。

## ● 即席介護、頼るしか

### ■ 通所介護施設に宿泊

表通りの年越しそばの店に家族連れが並ぶ大みそかの夜、そこはひっそりとシャッターが閉じられていた。東京都世田谷区の住宅街。路地の奥の戸建て住宅を改装した施設に、この夜も3人が泊まった。

通称「お泊まりデイ」と言われる。昼に自宅から通うデイサービスの事業所なのに、泊まり続ける老人がいる。デイサービスの利用は10人ほどだが、6、7人が宿泊の常連だ。

ふだんは階段の上り下りができる2人は2階の6畳で、車椅子が必要な人は1階の8畳ほどの部屋にベッドを四つ入れて雑魚寝のように寝る。ベッドの間には衣類など生活用品を入れた紙袋が積まれ、ポータブル型のトイレが置いてある。

夜勤の職員は1人。夜は汚物の処理をしないため、朝は臭いがむっと鼻をつく。老人たちは狭い部屋に詰め込まれ、一晩800円の宿泊料を払う。

シズさん(92)は昨年末に来た。夫が亡くなった後、アパートで一人暮らしをしていたが、認知症が進み家で転んだ。病院が経営する老人保健施設に入っていたが、3カ月しか入れてもらえなかった。

「特別養護老人ホームは入所待ち。有料老人ホームも見たが、とても高くて」。親族はため息をつく。

デイサービスで通っていたキヨコさん(96)はいつしか長期連泊になった。自らトイレに行けず、食事も職員の介助で食べるが、硬いものは食べられない。

泊まる人では唯一、長男が薬を持って面会に来る。そのたびに「帰りたい」と訴える。玄関先で靴を探し帰ろうとしていたのを職員が見つけたこともあった。

一番若いフミコさん（65）はここでの生活が2年以上になる。食事やテレビを見る時以外はほとんど寝ている。脳梗塞（こうそく）の後遺症もあって物忘れがひどく、5分に1回は不安そうに聞く。「自分はどうなるの」

有料老人ホームは介護保険で介護費用の9割が賄われるため、国が部屋の広さやトイレなどの設備の基準を設けている。だが、お泊まりデイは保険の枠外のため国の基準もなく、老人がまともな介護を受けられない「劣悪介護」の温床だ。

「どこにも受け入れてもらえない老人がいるし、家族の負担も重い。現実には社会保障制度のはざまにいる人が多数派だ」。デイサービス大手「茶話本舗（さわほんぼ）」を運営する日本介護福祉グループ（本社・東京）の藤田英明会長は言い切る。お泊まりデイを売りに、創業7年ほどで加盟店を全国745事業所に広げた。世田谷区の事業所もその一つだ。

「劣悪な環境」との批判には、宿泊の受け入れ人数や日数を抑える自主ルールを作り、健全化に取り組んでいるという。それでも1割は未達成だ。

団塊世代がリタイアし、東京、大阪、福岡など都市部を中心に高齢化が進む。2025年には65歳以上の人々が3割を超える。その老後には大きな不安が待つ。（施設の利用者は仮名）（松浦新、松田史朗）